



祝祭日には国旗を掲げましょう。

大阪天満宮社報 第70号

# てんまてんじん



添  
風  
進  
上

平成二十八年 盛夏

表紙解説

どんじこ船 ..... 2 頁

天神祭特別ボスターを奉納 ..... 3 頁

フレーム切手天神祭2016 ..... 4 頁

神宮より撤下御神宝の下附 ..... 6 頁

フィリピン慰靈祭 ..... 8 頁

青年親睦会の参拝旅 ..... 10 頁

# どんどこ船

んどこ船」四艘でした。

新たに神鉾奉還式を

お務め頂くこととなりました。

▼前講元・夏凪秀之助氏の証言  
どんどこ船の歴史については、どんどこ船講の前講元・夏凪秀之助氏の興味深い証言がありますので(本誌第三十号・平成八年)、以下に再録しておきます。

天神祭に「どんどこ船」として仕立てられた船は、平素は本船から陸上へ貨物を運ぶための「伝馬舟」と呼ばれる船でしたから、私どもは常日頃、「どんどこ舟」も「伝馬」「てんま」と呼び慣わしています(中略)。

江戸時代以来の歴史を誇る「どんどこ船」が、一時途絶えたことがあります。それは、慶應元年(一八六五)から明治十五年(一八八三)までの船渡御の中止と深く関わっています。船渡御ばかりでなく、明治初頭には、御旅所の遷宮があり、御旅所付近で、再び陸渡御となりましたから、「どんどこ船」も先導の方法が変わったのでしょうか。中断後、再興されたのは、太平洋戦争までの「どんどこ船」で、今木青年会・難波島町神祇会・三軒家下之町・木津川三丁目の、主に木津川口沿岸の町々の繰り出した伝馬船「ど

り木津川岸の町々が廃墟となつたため、船渡御が復活した昭和二十四年(一九四九)の天神祭に「どんどこ船」を奉仕することは危ふまれています。戦争から復員した私は、筏師の元締めの家に生まれた縁で、木材関係者に協力を求め、戦前の散り散りになつていた四カ町から漕ぎ手に多数参加していただき、祭礼の盛り上げに成功しました。

しかし、それも束の間、「木場の町」であつた大正区小林町の木材業者とともに、住之江の平林地域へ集団移転が行われ、「どんどこ船」の運営は実質的には講元一人に集約されました。

「どんどこ船」は、二十四日の陸渡御には参加せず、独自に行動します(中略)。

強い流れには力の限り漕ぎ、低い橋をくぐる時には「肩を入れ(太鼓や神輿を担ぐ仕草)」ます。これは「橋掛け」の一聲で、全員が橋の下より両手で挿し上げて船を沈ませるのですが、見ていると漕ぎ手全員で、大きな橋を持ち上げているように映ります(下略)。

前講元は、この取材の後、天神祭を終えた八月二十一日に御逝去されました。享年八〇歳)、その跡を継がれた御子息の一嘉様も、数々のアイデアで天神祭に御奉仕いただいております。

平成十年には子供・どんどこ船を新造して、後継者の育成にも努められています。各地の祭礼において、その担当手不足が話題になっていますが、一嘉様の先見の明に感心します。平成十三年からは宵宮に船を陸揚げして宮入行事を始められました。二十年には鉢流神事で流された神鉾を本殿へ返納する本式は、御神意を拝承する御儀として、重要な御役目を担われています。

## 天神祭渡御行事保存協賛会

尾崎 裕 新会長就任ご紹介

本年五月二十三日、天神祭委員総会で出席者百二十名の御賛同を頂き、大阪商工会議所会頭の尾崎裕様に、天神祭渡御行事保存協賛会の会長を



## 天神祭船渡御の特別ポスターを奉納

写真家・山村善太郎氏

大篝船など、船渡御の中心的役割を担う渡御船で構成されています。今回のポスターを制作するために、山村氏が撮影や構成に要された期間は約三年だそうです。

また、準備期間もさることながら、撮影場所もその年々によつて様々で

す。監視艇や舞台船に乗り込み、時には橋の上や川岸など、ありとあらゆる角度から船渡御全体を撮影しながら、幾度も幾度も納得のいくまで繰り返し構成を考えられたとのこと

です。

山村氏が丹精込めて制作されたポスターで、大いに天神祭の前景気を盛り上げて頂きますよう願つております。

このたび、御鳳輦講の講員でもあるプロカメラマンの山村善太郎氏が、天神祭の特別ポスターを制作、奉納くださいました。

山村氏については、本社報第六四号の「あの人もこの人も」欄でご紹介致しましたように、これまでにも数多くの天神祭の写真を奉納頂いております。

山村氏は去る平成二十五年にもご自身でヘリコプターをチャーターされ、船渡御風景を空撮された写真をもとに「天神祭特別ポスター」を作成され、当宮に御奉納されています。このときも、各地域や講社をはじめ、ご参拝の皆様方に頒布させて頂き、大変に好評を博しました。今回の特別ポスターは、その第二弾目となりますが、前回に勝るとも劣らない非常に素晴らしい出来栄えです。

ポスターの図様は、天神様の御神靈を奉安する「御鳳輦奉安船」を中心各奉安船・講社供奉船・舞台船。



## 今年のテーマは

船渡御

⑨玉神輿

⑩若松浜の大鳥居

「鉢流神事」や「御鳳輦奉安船」などの一〇場面の写真で構成しました。

江戸時代に描かれた天神祭の絵画

から、歌川貞秀『浪速天満祭』や、

明治・大正期の

画家による天神祭

の絵画から、生田

花朝『浪速天神

祭』や上田耕甫

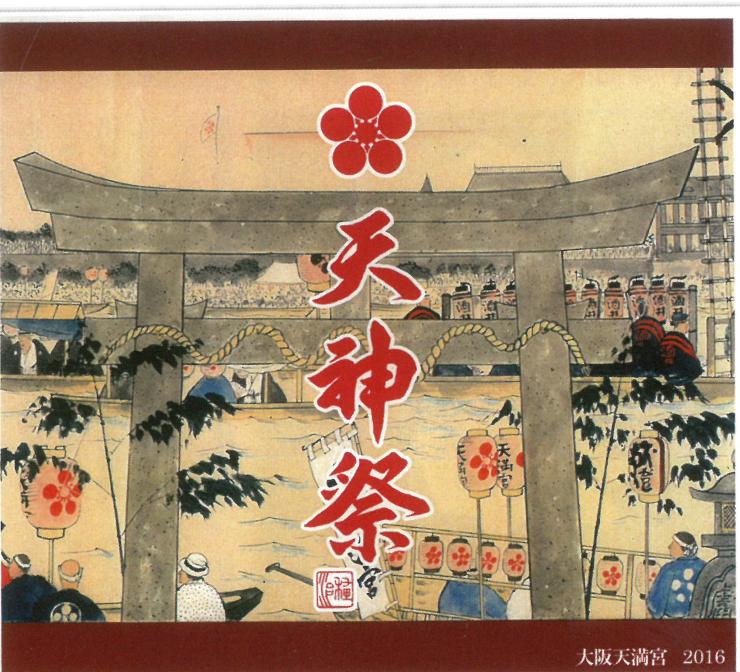
『船渡御図』など

を採りました。

（平成二十三年）

吉川進が大正一〇年の陸渡御の全貌を描いた『夏祭渡御図』から、「鳳神輿」「玉神輿」などを選びました。

- ◆ 今年の切手シート
- ① 催太鼓
- ② 天神講
- ③ 御鳳輦
- ④ 安倍保名
- ⑤ 大篝船
- ⑥ 御迎え人形
- ⑦ 佐々木高綱
- ⑧ 真田幸村



大阪天満宮 2016



○ 切手と写真部分を郵便物に貼ってご利用いただけます。  
写真部分だけでは、切手としてご利用いただけません。  
新規料金納付のためにこの切手をご利用の場合、各写真部分に消印がかかることがあります。

吉川進が大正一〇年の陸渡御の全貌を描いた『夏祭渡御図』から、「鳳神輿」「玉神輿」などを選びました。

天神祭のオリジナルフレーム切手セットが発売されました。天神祭のフレーム切手としては、平成一九年から二二年まで五種類が販売されていますが、その後しばらく途絶えていました。このたびは六年ぶりの六種類目の発行となります。

今年のテーマは、船渡御です。吉川進が大正一〇年（一九二二）の船渡御の全貌を描いた『夏祭渡御図』から、以下の〇〇場面を抜き出して一枚シートに仕上げました（八二円切手一〇枚シート、価格一五〇〇円）



市之側「永錫」「祐胤」



老松町一丁目「夜燈」

## お祭り提灯の三つの役割

「提灯」と言えば、足元や店先を照らすだけの器具だと思いがちです。しかし「お祭り提灯」の場合は、

帝国ホテル南隣のOAPプラザでは、毎年「天神祭展」を開催されていますが、今年は同プラザの開業20周年を記念して、かつての当宮氏地に輝いた個性豊かな「お祭り提灯」二八張を再現・展示されています。

## お祭り提灯の文字はなぜ読みにくいのか？

では、町内ごとに独自の文字を書いた揃いのオリジナル提灯が用意されていました。しかも、その文字は難しい漢字を読みにくい篆書（てんしょ）や隸書（れいしょ）などの字体で墨書きされているのです。

提灯に難しく読みにくい文字が書かれています。

さて、このように、祭り提灯は互いのコ

では、町内ごとに独自の文字を書いた揃いのオリジナル提灯が用意され

ていました。しかも、その文字は難

しい漢字を読みにくい篆書（てんしょ）や隸書（れいしょ）などの字体

で墨書きされているのです。

## 神宮より

## 撤下御神宝の下附

## ・特別に四点の下付

伊勢神宮では二〇年ごとに全ての社殿を新築し、その調度品を新調する「式年遷宮（定期的に行われる遷宮）」が行われていることはご存じのことだと思います。

このたびの第六二回式年遷宮では、平成二五年一〇月に、内宮外宮の御正殿の「遷御之儀」が斎行され、当宮の寺井宮司も供奉員として奉仕をいたしました。

平成二七年三月には全ての遷宮事業が完遂し、これとともに撤下された御神宝が一部の神社へ下附されたのですが、大変有難いことに当宮もこの栄に浴することとなりました。昨年十二月二十四日、神宮の大前に宮司が参上し、これらの御神宝を拝受するとともに、当宮にご関係の皆様に御案内し、一月二十一日から四度にわたって、内覽の会を催しました。

は恐懼に堪えないところです。当宮は末社に神明社を奉齋し、明治四十三年には遷宮後の古材を拝領して現在の結婚式場「梅花殿」を建設するなど、伊勢神宮とは深いご縁がござります。お伊勢様との御神縁がより深まり、次回の遷宮奉賛活動の宣揚のためにも誠に意義深く有難いことであると、皆様とともにお慶び申し上げたいと存じます。

れ、一五七六点もの御装束神宝が一三〇〇年前と全く同じ形で忠実に製作されます。その後は、埋納されるのが古来の仕通りでした。近代になつて、神宮に特に関係の深い一部の神社だけに下附されることがあります。

今般は数十社の神社に下附されることになり、当宮には四点もの下附がありました。格別の待遇を賜りましたことは恐懼に堪えないところです。

当宮は末社に神明社を奉齋し、明治四十三年には遷宮後の古材を拝領して現在の結婚式場「梅花殿」を建設するなど、伊勢神宮とは深いご縁がござります。お伊勢様との御神縁がより深まり、次回の遷宮奉賛活動の宣揚のためにも誠に意義深く有難いことであると、皆様とともにお慶び申し上げたいと存じます。

## ・当宮へ下附の御装束神宝



皇大神宮 御神宝  
梓 御弓 (あずさのおんゆみ) 壱張  
金銅作 御太刀 (こんどううつくりのおんたち) 壱柄



皇大神宮 御神宝  
梓 御弓 (あずさのおんゆみ) 壱張



豊受大神宮別宮 土宮 壱竿  
御鉢 (おんほこ)  
皇大神宮 別宮 倭姫宮御神宝  
御楯 (おんたて) 壱枚

## ・式年遷宮とは

神宮の式年遷宮は、原則として二〇年ごとに斎行されます（「伊勢神宮」というのは通称で、「神宮」が正式名称です）。

内宮外宮の正宮の正殿を始めとする別宮以下の諸神社の正殿を造替して神座を遷し、宝殿、外幣殿、鳥居、御垣、御饌殿など計六五棟の殿舎など全社殿を造替するほか、一五〇〇点を超える装束・神宝、宇治橋等も造り替えます。

古記録によれば、神宮式年遷宮は、飛鳥時代の天武天皇が定め、持統天皇四年（六九〇）に第一回が行われています。

その後、戦国時代の一〇〇年余の中断や、幾度かの延期などはあったものの、平成五年（一九九三）の第六二回式年遷宮まで、およそ一三〇〇年間も続く伝統行事です。

第六二回式年遷宮は、平成一七年から各行事が行われ、同二五年には遷御之儀が斎行され、外宮には当宮の寺井宮司が供奉員として御奉仕の栄を賜ったのです。

## 第二十回 海外研修について

権禰宜 川井 義晴

作年は大東亜戦争終結七十年の節目であり、戦争で亡くなられた英靈を偲び、また後世に託された思いを受け止め、今後の日本の在り方や我々の日常生活に於いての祖先への感謝の意を今一度見直す良い機会となつた。

また、本研修前に私の親族がフィリピンに於いて戦死していたことを聞き、本研修に参加することに深い御縁を感じた次第である。

研修初日は在比日本国大使館へ表敬訪問をさせて頂き、大使よりフィリピンの歴史や社会情勢等について伺つた。

二日目には、日本政府が唯一建立したカラリア日本人戦没者慰靈碑前において献花を行い、英靈を偲んで参拝。続いてホテルではデ・ラサール大学のカストロ教授より「南沙諸島を巡る領土問題とフィリピンの国防の在り方」についての御講演をいただいた。教授は「フィリピン一国

では到底中国には勝てない、自國を弱小国と認め ASEAN諸国と協力し領有権を主張していく」ということを熱く語られた。

止め、英靈の思い、歴史とともに後世に伝えることが我々の責務であるとの思いを強くする研修であつた。

三日目には、神風特別攻撃隊の一陣が発出したマバラカット西飛行場跡地に於いて戦没者慰靈祭が厳粛にご斎行された。常日ごろ私が行つてゐる神事とは全く違う感覺、思ひあつた。神事斎行中に時おり凄まじい強風に煽られたが、英靈の強い思念の風のようを感じられ、不思議な感覚に陥つたのは私だけではなかつたようだ。

移動中の車中では、在比ガイドがフィリピンの歴史を解りやすく説明して下さつた。

戦後の日本は犯した過ちを認め、日本政府がフィリピン国へ何度も謝罪したけれども、当時はフィリピン国内の反日感情も強く、受け入れられた状況ではなかつた。

のちのマルコス政権時に和平が訪れたが、その時の大統領の「我々は日本を許すことはできても、忘れるることは決してできない。人は忘れるべし」と再び同じ過ちを繰り返す。二度とこのような悲劇を繰り返してはならない」という言葉が、非常に印象的だつた。この言葉をしつかりと受け



## 初天神 「福玉まき」



当宮の「初天神梅花祭」は、例年一月二十四日（宵宮）・二十五日（本宮）に斎行され、その神賑行事として「福玉まき」が執り行われています。

「福玉まき」では、当宮総代はじめ、在阪球団の野球選手、地域の著名人、還暦を迎える氏子の方々にボール投げのご奉仕を頂いています。

「福玉まき」では、当宮総代はじめ、在阪球団の野球選手、地域の著名人、還暦を迎える氏子の方々にボール投げのご奉仕を頂いています。

昨年に続き第二回となる法楽連歌が、六月三日の午後当宮參集殿大広間を連歌所として開催されました。

本年も高城修三先生を宗匠として三十二名の参加者を得、賑々しく且つ厳肅な雰囲気で行われました。

## 青年親睦会

### 参拝旅行

当宮の青年親睦会は、毎月の境内清掃をはじめ、えびす祭招福行列などの諸行事に御奉仕いただいています。氏子・崇敬者の青年有志が、地域の活性化と御祭神の神徳宣揚を目的として結成された会です。

同会では、当宮神職も同行させていただく参拝旅行を、毎年の秋行っていますが、大東亜戦争終結七年の昨年は、十一月三日に靖國神社で昇殿参拝をさせて頂きました。

当日は、午前から明治神宮で自由参拝を行い、昼食をしました後、靖國神社へ向かいました。靖國神社には、幕末・明治維新・日露戦争・大東亜戦争などの国難に際して「国安かれ」の思いのもと、国を守るために尊い生命を捧げられた、二百四十六万六千余柱の方々の御神靈がお祀りされています。

平素は、活力に溢れんばかりの会員のみなさんも、靖國神社の神職さん



明治神宮で集合写真

のご案内で御本殿へと進む際には、緊張した面持ちで昇殿され、英靈の御靈に哀悼の誠をささげられました。また参拝後には、遊就館を拝観させて頂きましたが、幕末から大東亜戦争の終焉に至る軍事関係の資料や、遠く戦地より家族を思い書かれた手紙など、多数の資料が展示されており、現在の我々の生活が、尊い犠牲のものと成り立つてることを痛感致しました。

その後、場所を移し、夕食は月島で「もんじゃ焼き」を頂きました。会員の皆さんは普段のエスカルゴシユな様子に戻り、会員相互の親睦を深めていらっしゃいました。

そこで、場所を移し、夕食は月島で「もんじゃ焼き」を頂きました。会員の皆さんは普段のエスカルゴシユな様子に戻り、会員相互の親睦を深めていらっしゃいました。

## 浪速菅廟吟社詠草

雪枝 松村暁二撰

### 三月席題 春寒即詠

てあじがあり、杖を止めて命さん婆さんが春に酔いました。

#### 一月課題 人

粕春 中島 結樹 横浜市

四十丈夫雖不惑 年年歳歳易流行

(訓読)四十の丈夫、惑はずと雖も、風沙雨雪碑文滅 萬骨勲功在太平

年年歳歲、流行するに易し。風沙雨

雪に碑文滅すれば、萬骨の勲功太平に在り。

(通釈)四十歳になり不惑と言うけれど、毎年毎年流されて行く。いよいよ風化がすすみ碑文も消えようとしているが、世に捧げた勲功は平和にある。

#### 二月課題 園苑探梅

流瀬 菅 千鶴子 大阪市

攜手探梅花影新 清香漾處慰騷人

深閑時聽鶯聲澁 停杖媼翁同醉春

(訓読)手を携えて梅を探れば花影新なり、清香漾ふ処騷人を慰む。深閑時に聴く鳶声澁く、杖を停めて媼翁

同(とも)に春に酔る。

(通釈)翁嫗と誘い合つて梅を探りにかけたら花が咲きかけていて、よい香りが詩人たちを慰めた。とつても静かなところで鳶の鳴き声が澁く

同(とも)に春に酔る。

(通釈)翁嫗と誘い合つて梅を探りにかけたら花が咲きかけていて、よい香りが詩人たちを慰めた。とつても静かなところで鳶の鳴き声が澁く

#### 四月席題 山寺觀櫻

苔菴 揚田 崇徳 得虞

尋來古刹碧山隅 石檻櫻濃一日娛

停杖仰望春靄裏 香雲宛是結跏趺

(訓読)尋ね来る古刹碧山の隅、石檻

の桜は濃(こま)やかにして一日の娛

杖を停め仰望す春靄の裏、香雲は宛

も是、結跏の趺。

(通釈)尋ねてきた古寺は青あおどした山のほとりにあり、石段は桜並木が続いている。立ち止まつて春霞の

杖を停め仰望す春靄の裏、香雲は宛

も是、結跏の趺。

(通釈)尋ねてきた古寺は青あおどし

た山のほとりにあり、石段は桜並木が続いている。立ち止まつて春霞の

杖を停め仰望す春靄の裏、香雲は宛

も是、結跏の趺。

## 西天満小学校二年生 地域探訪

天神祭や、天満宮および御祭神について、様々な質問をされていました。

児童の皆さんは御行儀も良く、そ

のはつらつとした姿に、当宮職員も、

今後の神命奉仕や、雅楽演奏などについても精進しなければいけないと励されました。

「神童」は同小学校の児童から選出され、00歳ほどの地にあります。

西天満小学校は、当宮から西方500mほどの地にあります。

「神童」は同小学校の児童から選出され、00歳ほどの地にあります。

西天満小学校は、当宮から西方500mほどの地にあります。

「神童」は同小学校の児童から選出され、00歳ほどの地にあります。

西天満小学校は、当宮から西方500mほどの地にあります。

「神童」は同小学校の児童から選出され、00歳ほどの地にあります。

西天満小学校は、当宮から西方500mほどの地にあります。

「神童」は同小学校の児童から選出され、00歳ほどの地にあります。

西天満小学校は、当宮から西方500mほどの地にあります。

「神童」は同小学校の児童から選出され、00歳ほどの地にあります。

西天満小学校は、当宮から西方500mほどの地にあります。



高島幸次著

## 奇想天外だから史実

### —天神伝承を読み解く—

理解不能な伝承

全国の社寺には、その創建から発

展の過程を物語る様々な伝承が伝えられていますが、なかでも天神信仰

に関わる伝承は最も数多く、バラエ

ティに富んでいます。

しかし、それらの豊かな天神伝承

のなかには、京都の菅原道真邸の梅

が九州の太宰府に飛んだという「飛

梅伝承」のように、現代科学では否

定されるような奇想天外なものが多

いため、その伝承の意味するところ

は深く考えられないまでした。

そこで、当宮文化研究所の高島幸

次先生が、それらの奇想天外な伝承

に込められた古代人のメッセージを

読み解く近著『奇想天外だから史

実』を出版されました。

同書の伝承に取り組む基本的なス

タンスは、次の言葉によく表されています。

誤解を恐れずにいえば、現代

の私たちにとって理解しやすい

伝承は、それだけ後世に改訂さ

## あの人もこの人も

第十五回



樽野博明さん

今回は、西天満の鰻料理屋、志津可の樽野博明（たるの・ひろあき）さん（六九）をご紹介いたします。

大正初期に、樽野さんの母方のお祖母さまが、現在の繁昌亭前から商店街に至る道筋で、小料理屋として志津可を創業なさったそうです。この初代は三味線の名手であり、志津可という名でお座敷の囃子方として活躍なさっていました。その名が店名の由来だということです。お祖母さまはグルメな方で、「鰻は関東式が一番」と、お知り合いの板前を雇って志津可の基礎を築かれました。近隣にお住まいの各師匠方が活躍する当宮の盆踊りでも一際目をひく粋な祖母だった、と博明さんは回想な

れた可能性が高いのです。反対に、奇想天外で理解不能な伝承こそ古体を引きずつており、眞実を宿している。逆説的ですが、「奇想天外だから史実」というのはそういうことです。

### 七本松伝承の場合

たとえば、一夜のうちに七本の松が生えて夜ごとに光り輝いたから大

阪天満宮が創祀されたという伝承は、そのまま読めば、七本松と天満宮のつながりさえ見えません。

しかし、七本松が大将軍社の前に生えたことに着目すると、実は天神信仰に先行する大将軍神の星辰信仰の存在が浮かび上がります。

また、天神信仰が成立した平安中期における京都周辺の植生が、照葉樹林（光沢のある葉を持つ楓など）から針葉樹林（針状の葉を持つ松など）に変わったことを踏まえると「松」の持つ象徴的な意味が浮かび上がってくるのです。

たとえば、一夜のうちに七本の松が生えて夜ごとに光り輝いたから大

阪天満宮が創祀されたという伝承は、そのまま読めば、七本松と天満宮のつながりさえ見えません。

しかし、七本松が大将軍社の前に生えたことに着目すると、実は天神

信仰に先行する大将軍神の星辰信仰の存在が浮かび上がります。

また、天神信仰が成立した平安中期における京都周辺の植生が、照葉樹林（光沢のある葉を持つ楓など）から針葉樹林（針状の葉を持つ松など）に変わったことを踏まると「松」の持つ象徴的な意味が浮かび

たとえば、一夜のうちに七本の松が生えて夜ごとに光り輝いたから大

阪天満宮が創祀されたという伝承は、そのまま読めば、七本松と天満宮のつながりさえ見えません。

しかし、七本松が大将軍社の前に生えたことに着目すると、実は天神

信仰に先行する大将軍神の星辰信仰の存在が浮かび上がります。

また、天神信仰が成立した平安中期における京都周辺の植生が、照葉樹林（光沢のある葉を持つ楓など）から針葉樹林（針状の葉を持つ松など）に変わったことを踏まると「松」の持つ象徴的な意味が浮かび

たとえば、一夜のうちに七本の松が生えて夜ごとに光り輝いたから大

阪天満宮が創祀されたという伝承は、そのまま読めば、七本松と天満宮のつながりさえ見えません。

しかし、七本松が大将軍社の前に生えたことに着目すると、実は天神

信仰に先行する大将軍神の星辰信仰の存在が浮かび上がります。

たとえば、一夜のうちに七本の松が生えて夜ごとに光り輝いたから大

阪天満宮が創祀されたという伝承は、そのまま読めば、七本松と天満宮のつながりさえ見えません。



前号（六十九号）で紹介しました。

講社会合においてお披露目されました。

た講社連合会の四十周年を記念した奉納である表大門の「紋帳」が完成

当初の予定では、今年のお正月に

お披露目できるはずだったのですが、

お披露目できませんでした。

し、五月十二日に開催された天神祭

お披露目できました。

た講社連合会の四十周年を記念した奉納である表大門の「紋帳」が完成

お披露目できました。

### 序章 神仏習合と天神信仰

#### 第一章 大将軍社のメッセージ

#### 第二章 飛梅伝承と渡唐天神伝承

#### 第三章 「飛梅伝承」の変遷

#### 第四章 北野天満宮の松と安楽寺の梅

#### 第五章 天神信仰と鶴・牛・柘榴

#### 第六章 神牛伝承

#### 第七章 柘榴天神伝承

#### 第八章 道明寺鶴鳴説話

#### 第九章 萱公愛梅説

#### 第十章 渡唐天神伝承

#### 第十一章 「飛梅伝承」の変遷

#### 第十二章 北野天満宮の松と安楽寺の梅

#### 第十三章 天神信仰と鶴・牛・柘榴

#### 第十四章 神牛伝承

#### 第十五章 柘榴天神伝承

#### 第十六章 道明寺鶴鳴説話

#### 第十七章 萱公愛梅説

#### 第十八章 渡唐天神伝承

#### 第十九章 「飛梅伝承」の変遷

#### 第二十章 北野天満宮の松と安楽寺の梅

#### 第二十一章 天神信仰と鶴・牛・柘榴

#### 第二十二章 神牛伝承

#### 第二十三章 柘榴天神伝承

#### 第二十四章 道明寺鶴鳴説話

#### 第二十五章 萱公愛梅説

#### 第二十六章 渡唐天神伝承

#### 第二十七章 「飛梅伝承」の変遷

#### 第二十八章 北野天満宮の松と安楽寺の梅

#### 第二十九章 天神信仰と鶴・牛・柘榴

#### 第三十章 神牛伝承

#### 第三十一章 柘榴天神伝承

#### 第三十二章 道明寺鶴鳴説話

#### 第三十三章 萱公愛梅説

#### 第三十四章 渡唐天神伝承

#### 第三十五章 「飛梅伝承」の変遷

#### 第三十六章 北野天満宮の松と安楽寺の梅

#### 第三十七章 天神信仰と鶴・牛・柘榴

#### 第三十八章 神牛伝承

#### 第三十九章 柘榴天神伝承

#### 第四十章 道明寺鶴鳴説話

#### 第四十一章 萱公愛梅説

#### 第四十二章 渡唐天神伝承

#### 第四十三章 「飛梅伝承」の変遷

#### 第四十四章 北野天満宮の松と安楽寺の梅

#### 第四十五章 天神信仰と鶴・牛・柘榴

#### 第四十六章 神牛伝承

#### 第四十七章 柘榴天神伝承

#### 第四十八章 道明寺鶴鳴説話

#### 第四十九章 萱公愛梅説

#### 第五十章 渡唐天神伝承

#### 第五十一章 「飛梅伝承」の変遷

#### 第五十二章 北野天満宮の松と安楽寺の梅

#### 第五十三章 天神信仰と鶴・牛・柘榴

#### 第五十四章 神牛伝承

#### 第五十五章 柘榴天神伝承

#### 第五十六章 道明寺鶴鳴説話

#### 第五十七章 萱公愛梅説

#### 第五十八章 渡唐天神伝承

#### 第五十九章 「飛梅伝承」の変遷

#### 第六十章 北野天満宮の松と安楽寺の梅

#### 第六十一章 天神信仰と鶴・牛・柘榴

#### 第六十二章 神牛伝承

#### 第六十三章 柘榴天神伝承

#### 第六十四章 道明寺鶴鳴説話

#### 第六十五章 萱公愛梅説

#### 第六十六章 渡唐天神伝承

#### 第六十七章 「飛梅伝承」の変遷

#### 第六十八章 北野天満宮の松と安楽寺の梅

#### 第六十九章 天神信仰と鶴・牛・柘榴

#### 第七十章 神牛伝承

#### 第七十一章 柘榴天神伝承

#### 第七十二章 道明寺鶴鳴説話

#### 第七十三章



## 太鼓中 総代

### 西川輝彦氏 叙勲

大阪天満宮を支えて下さる講の一つ、太鼓中の総代である西川輝彦氏が、春の叙勲において、畏き辺りより瑞宝双光章(すいほうそうこうしょう)に叙せられました。この勳章は、公共的な職務の複雑度、困難度、責任の程度などを評価し、職務をはたし成績をあげた人に対して授与されるものです。西川氏は、五十三年の長きにわたって淀川左岸水防事務組合に所属し、水防功勞に尽力されたことにより受章されました。



去る六月十三日に、西川氏は、受章報告の参拝のため、当宮にお越しになりました。

受章にあたつて、宮中に参内して拝謁を賜つたことを、ご本人は「これまでの人生で、これほどうれしく、また、名譽な事はございません」とおっしゃっています。感激に耐えな  
いご様子でありました。

西川氏は、例年の天神祭陸渡御、船渡御の先陣を切る『催太鼓』の総括責任者であり、また約八〇〇名からなる『太鼓中』の総代としても、

永きに亘り御奉仕戴いております。どうぞ本年もご健勝にてご奉仕賜りますようお願い致します。

## 編集後記

六、七頁に記載しました神宮の御神宝が大変貴重であることはいうまでもありませんが、当宮にはこの他に天神画像や書蹟などの千点を超える宝物があり、御文庫には十五万冊を越える和書漢籍が収蔵されています。

神宮では早くから美術館や歴史館などの博物館施設が整備され、その展示や保管に、十分な施設を管理運営されています。第六十二回式年遷宮を期して、神宮では「せんぐう館」が創設されました。

せんぐう館は二十年に一度行われる神宮式年遷宮を通じて、広く我が国の伝統・文化を伝え、日本人の営みと精神文化の中心にある神道の継承をめざしています。

御装束神宝の調製は金工・木工・漆工・染織といった我が国伝統の工芸技法を駆使して行われます。その目的は、次世代の匠たちに、御装束神宝の調製に古来より受け継がれてきた心と技を伝えることです。

当宮には今のところ御文庫、宝庫があるのみで、一般に公開された展示施設は所有していないません。多数の宝物、資料は学術研究を対象とした場合にのみ開封されていますが、

近年は、「てんまでんじん梅まつり」の期間に一部を公開するなどして、広くご覧頂くようになりました。

当宮の式年制度は二十五年ごとであり、前回は、平成十四年に菅原道真公一千百年式年大祭が盛大に斎行され、御本殿の修復をはじめ、様々な記念事業も遂行されました。次の式年大祭は平成三十九年に一千二十五年祭が斎行される予定です。で、もう余すところ十年あまりとなりました。

前回同様多くの記念事業の計画がなされる予定です。つきましては、宝物殿、資料館の役割を果たす施設が切望されています。度重なる戦火にも拘わらず献納されてきた多くの宝物は、献納者の至誠の証であり貴重な文化財であります。これらの形と心を大切に保存し未来に継承することは神社の使命であると考えます。

大阪天満宮社報  
**てんまでんじん** 第70号

平成28年7月20日印刷  
平成28年7月25日発行  
発行人 寺井種伯  
〒530-0041 大阪市北区天神橋2-1-8

印刷所 木村印刷株式会社